卒業の活躍
博物館に勤めて

学芸員　小西　洋子

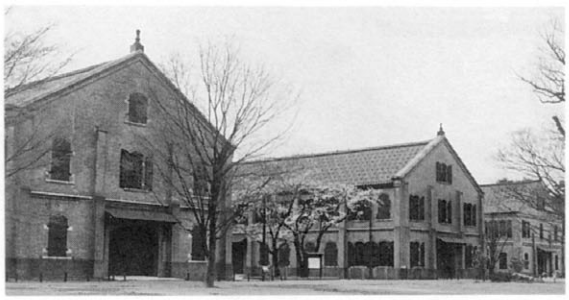
私は，平成二年に文学部史学科（日本史研究室）を卒業して，今の職に就きました。一応九年目に突入したことになります。この九年が長いか短いかは難しい所ですが，本人の実感としては未だ半人前という感じです。年齢的にも下から二番目です。つまり，今から書く話は「下っぱ学芸員」から見た学芸員の仕事ということになります。

学芸員の仕事は，皆さんご存じのとおり，資料の収集・保存・調査・研究，そして普及・教育です。ただ，この割合が各博物館施設によって異なり，それが博物館を特徴付けることにもなっています。また，これらの仕事に伴う事務をどの程度学芸員がしなくてはならないかということも，その博物館の規模によって違ってきます。

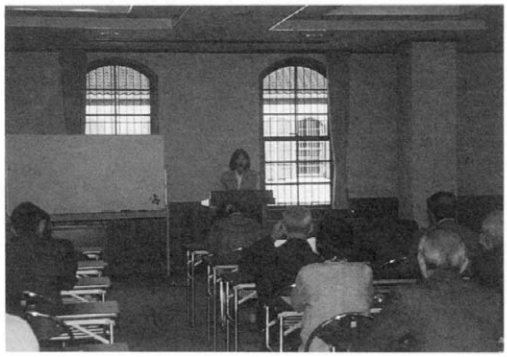
私の職場では，総務課がお金にかかわる事務の大半をしているので，学芸員が備品購入や職員の給与に関する事務をすることはありません。それでも，資料（写真を含む）の貸借や寄付受納，特別展に関わる事務等はかなりあります。私の場合，平成八年度まで資料の貸借や特別利用などの仕事を担当していたので，それが仕事時間の大部分を占めており，その他は特別展の準備に追われていました。私の職場は，年に４回の特別展+企画展が数回あり，それはすべて自主企画でやっている博物館としては非常に多い方なのです。

したがって，資料の調査・研究ということは勤務時間にはほとんどできず，特に最初の数年は特別展や館内の講演会・古文書講習会の準備も勤務時間にはできず，家に持ち帰っていました。三・四年過ぎると，なんとか館の仕事に関わる調査・準備は勤務時間でするように努力できるようになりました。現在は，比較的事務量の少ない部門の担当になったので，館の仕事に関わる調査はほぼ仕事時間中で処理しています。

私自身もそうなのですが，研究を続けたいからという理由で学芸員を志望する方が多いと思います。しかし，研究できる職場環境にいる学芸員というのは非常に少ないと思います。自分の研究はあくまでも自分の時間でやるしかないことです。しかし，悲観することはないと思います。学芸員は広い知識が要求されます。その場その場で，自分の専門外のこともかじらなくてはなりません。私自身は学生時代は中世前期の家や女性の問題というごく限られたテーマで勉強していました。しかし，就職してからは近世文書を見る機会も増え，考古学や民俗学の人と話をすることもあって視野が広くなった気がします。文献史学では見落としがちな美術工芸・歴史考古資料のありがたみも実感しています。自分のペースをつかむまでは大変ですが，この環境を生かすも殺すもその人次第，というところでしょう。（私が生かしているかは，わかりませんが。）



石川県立歴史博物館



公立博物館をとりまく文化財行政そのものの状況が厳しくなっている今日この頃，博物館もイベント性ばかりが要求される傾向があります。イベントが増えればその準備に追われ，資料の整理事業が手薄になるだけでなく，イベントそのものの質を維持することも難しくなります。長い目でみれば資料の調査整理・研究も公共性の高い仕事だと思うのですが，速効性のないことはなかなか評価されません。また，展示の質の高さと入館者の数は必ずしも比例しませんし，一般の来館者の欲しい情報とこちらの流したい情報は必ずしも一致しません。歴史を学ぶ者として，力量の問題はともかく，良心的な仕事をしたいと思う一方，「学芸員の自己満足」に陥ることも戒められるべきだと思っています。常にジレンマの中で試行錯誤している状態です。

ところで蛇足ですが，私は現在，埋蔵文化財の調査をしている夫と一歳の息子の三人暮らしで，今年中にもう一人家族が増える予定です。近年，女性の学芸員も，学芸員希望者も多いようですが，結婚して子供も欲しいという方は，それなりの配偶者（配偶者の理解と協力は絶対不可欠です）と覚悟が必要だと思います。公立博物館の場合，育児休暇や育児時間制度は整備されつつあるとはいえ，自分の研究時間を確保するのが非常に難しくなるのですから。しかし，私でもなんとかやっていることですし，少なくとも仕事中には専門分野にかかわっていられるというメリットがあります。大変ですが，やりがいもあるので，これから学芸員になるつもりのみなさん，一緒にがんばりましょう。

（石川県立歴史博物館）